

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：14302

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06119

研究課題名(和文)17世紀の神聖ローマ皇帝軍と貴族の社会的ネットワーク

研究課題名(英文)The imperial army of the 17th century Holy Roman Empire and the social network of aristocracy

研究代表者

斉藤 恵太(Saito, Keita)

京都教育大学・教育学部・講師

研究者番号：20759196

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は軍隊を例に、近世ヨーロッパにおける君主と貴族の関係を特徴づける重要な側面を明らかにした。具体的には17世紀の神聖ローマ皇帝軍に焦点を合わせ、君主が軍隊を統制しようとする試みは上からの一方的かつ単線的な制度的発展としてだけ進行したのではなく、政治的・軍事的エリートである貴族との共存・協力関係を構築する双方向的な過程として進行したことに注目した。そしてこの過程の中で貴族の社会的ネットワークが、軍隊の設立と運営の両面で重要な意味を持ったとの見解を得られた。

研究成果の概要(英文)：This research project sheds light on one of the most important aspects of the relationship between monarch and aristocracy in early modern Europe. Focusing on the Imperial army in the 17th Century Holy Roman Empire it has demonstrated that the attempts of the emperor to control his emerging standing army was not top-down but reciprocal process in close relationship with the nobles who served as military officers. Accordingly, their support based on their social network was essential for the recruitment and administration of the imperial army.

研究分野：近世ヨーロッパ史

キーワード：西洋史

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、軍隊という視角から近世ヨーロッパの歴史を捉え直し、「絶対主義の時代」という一面的な理解に代わる時代像の構築を図るものであった。16～18世紀にまたがる近世ヨーロッパ史において、軍隊は官僚制と並んで、君主による集権的な国家形成の核とみなされてきた。そのため、近世国家の特質をめぐって20世紀後半から進められてきた議論では、フランスを中心に軍隊の見直しも進められ、王権による一元的な統制の限界が明らかにされた。近年の研究では、むしろ軍隊の構成員が取り結んだ社会的関係の多元性が近世の特徴として強調されている(C. Rogers ed., *The military revolution debate*, Colorado 1995; D. Parrott, *Richelieu's army*, Cambridge 2001)。

こうした研究動向は、軍隊というテーマ自体が戦後は長らく忌避されてきたドイツ語圏でも1990年代に受容された。プロイセンを中心に、兵士の脱走や、駐屯軍と市民の対立・協調など、軍隊の実態や社会との関わり合いが問われるようになったのである(阪口修平編『軍隊』ミネルヴァ書房2009)。当該分野の今後の課題は、プロイセン以外の領邦に目を向けると同時に、個々の事例研究を発展的に統合し、神聖ローマ帝国という広い視野から近世の特質を際立たせるような全体像を描き出すことである。

この課題に取り組むにあたって、筆者は、上記の研究動向と史料状況について三十年戦争期(1618-48)を中心に整理したうえで、本研究課題の開始までに包括的な議論の枠組みを段階的に構築してきた。具体的にはまず、従来の研究で十分な検討が進められてこなかった大領邦バイエルンにおける軍隊の実態を明らかにした。この研究の特徴は、軍隊をめぐる社会関係に目を向け、貴族に光を当てた点にある。従来の理解において貴族は、市民層を主な担い手とする官僚制が整備されるにつれ、活動の場を宮廷や領地経営に限定されたと考えられてきた。それに対して筆者は、貴族が傭兵隊長としての軍務に新しい活路を見出したこと、また君主が軍の結束と忠誠を保つためには、官僚的な機構よりも、むしろ縁故主義に基づく貴族同士の結びつきが大きな意味を持ったことを明らかにしてきた。

さらに筆者は、領邦を超えた帝国レベルの視座を設けてきた。そして、軍隊を君主権力に取り込もうとする試みは、領邦という閉じた空間で単線的に進んだのではなく、帝国で同じく軍事力の掌握を図る皇帝の介入を受けたことを明らかにした。従来のドイツ史研究において、皇帝は17世紀に帝国における影響力を失い、代わりにプロイセンやバイエルンをはじめとする領邦君主が台頭したと考えられてきた。これに対して筆者は、身分昇格をはじめとする皇帝の特権は、社会的上

昇を目指す傭兵隊長たちにとって領邦の枠を超えた求心力を持ち、皇帝軍への鞍替えすら促したことを示した。この研究の意義は、皇帝の伝統的な権威を同時代人の視点から再検討することで、「領邦と皇帝」という、帝国の二元的な権力構造を浮き彫りにした点にある。

## 2. 研究の目的

以上に示した背景をふまえ、本研究課題では、筆者が今まで個別に検討してきた貴族と皇帝を総合的に捉え直すことで新しい歴史像の構築を目指した。そのために筆者が注目したのが皇帝軍である。この軍隊は大領邦オーストリアの兵力であると同時に、皇帝の直属軍として、帝国の貴族に強い影響力を持った。皇帝軍に着目することで、軍事力の集権化を図る君主の取り組みと、軍務を通じた貴族家門の生存戦略について、帝国の次元を視野に入れつつ照らし出すことができると考えられる。

## 3. 研究の方法

本研究は、上記の目的を達成するために以下の三つの論点を設定し検討した。

### (1) 常備軍の創設

近世ヨーロッパでは、軍隊はもともと戦時だけ組織され、運営も傭兵隊長に委任されるのが一般的だった。平時における行財政負担を避けるためである。しかし17世紀になると、君主たちは常備軍を創設し、自律的だった軍隊の統制の強化を図るようになる。特に三十年戦争は、戦乱の続いた期間と規模からして決定的な意味を持った。したがって本研究課題は出発点として、ヨーロッパの君主たちはこの戦争を機にどのように軍事力の常備と集権化に取り組んだのか、という点について、まずは軍事制度を比較し、ヨーロッパの一般的傾向の中で皇帝軍の特徴を検討することとした。

### (2) 貴族の社会的ネットワーク

皇帝軍では、例えばフランスに比べて官僚による行政機構が未発達だったため、高い組織力を持つ仲介者なしには軍事力を保持できなかった。この点に関して、傭兵隊長となった貴族のネットワークは、国家的制度を補い、皇帝が人材や資金を得るための回路として機能した。特に重要なのがパトロネジである。パトロネジの基本的性質は、官職の任命権のような社会的資源を持つ者が特定の被保護者に優先的に機会を与え、被保護者は公務と同時に私的な奉仕(資金・情報の提供等)を通じてパトロンを支援する、という互酬関係にある。例えば傭兵隊長の典型とされるヴァレンシュタインは、皇帝の総司令官という地位を元手に貴族たちのパトロンとなる一方、貴族の私的ネットワークを動員して広域が

ら人材や資金を募っていた。こうした互酬関係がどのように築かれ展開したのかを検討するのが本研究の第二の課題である。

### (3) 皇帝によるパトロネジの再編

傭兵隊長を軍事力の仲介者とするシステムは、軍内のパトロネジの頂点に立つ傭兵隊長に皇帝が依存するというリスクを伴った。事実、皇帝は1630年代にヴァレンシュタインと対立し暗殺することになる。本研究が着目するのは、こうして解体されたパトロネジの再編過程である。皇帝は人材や資金の調達にあたって引き続き貴族のネットワークを必要としたが、軍事力を掌握するためには人事権を独占し、自らパトロンとして貴族と関係を結ばねばならなかった。その際、皇帝が帝国首長の特権として爵位・所領の分配権を有したことは、家門の存続を図る貴族たちにとって大きな魅力だったと考えられる。このように、皇帝と貴族が結んだ互酬関係という観点から「常備軍の創設」を再検討し、君主による一方的な支配の過程としてではなく、君主と貴族が互いに利益を引き出す交渉の過程として国家と軍隊の関係の変化を捉え直すことが本研究の目標である。

## 4. 研究成果

本研究は2015年8月末から2017年3月末を研究期間とした。そのうちの2015年8月から2016年3月にかけては、(1)「常備軍の創設」と(2)「貴族の社会的ネットワーク」という二つの論点を中心に研究を遂行した。

まず(1)「常備軍の創設」という問題に関しては、筆者が本研究以前から進めてきた研究と本研究課題を発展的に統合した。具体的には、バイエルン、オーストリア、フランスを主な対象として、常備軍の制度的な支えとなった軍務官制度の展開を比較史的に検討した。その結果、フランスやバイエルンでは三十年戦争を機に軍事行政機構の組織化が比較的テンポで進展したのに対し、皇帝軍では傭兵隊長ヴァレンシュタインの個人的な人脈が当初は決定的な意味を持ったことが明らかになった。また、バイエルンの軍務官制度を担った役人層は、領邦君主への高い忠誠を期待できる社会的背景を持ったにも関わらず、領邦君主と皇帝の間で忠誠のせめぎ合いに置かれていたことも浮かび上がってきた。このことから、帝国における皇帝の権威の重要性を見直す手がかりを得た。

以上の成果は、史学会大会および早稲田大学高等研究院セミナーシリーズにおいて口頭で発表した。

また(2)「貴族の社会的ネットワーク」に関しては、基礎となる史料の調査・収集を中心に研究を進めた。具体的には、2016年2月にウィーンの国立文書館群とバイエルン

の州立文書館で史料調査を行った。これらの文書館には、ヴァレンシュタイン指揮下の皇帝軍で傭兵隊長として務めたイタリア貴族マティアス・ガラス(ガラッソ)とオッターヴィオ・ピッコロミニに関する書簡がある。それらの史料の調査・分析を通じて、イタリア貴族が婚姻関係などを通じて皇帝軍で張り巡らせた社会的ネットワークのありようについて概観を得ることができた。

2016年4月から2017年3月にかけての時期には、前年度に続いて(2)「貴族の社会的ネットワーク」に関する知見を深めると同時に、(3)「皇帝によるパトロネジの再編」という論点に関する調査と研究を進めた。

そのうちの「貴族の社会的ネットワーク」に関しては、刊行文献の調査に加えて、2016年の夏季にイタリアの文書館で未刊行史料の調査を行った。トレントやシエナに所在する文書館の調査を通じて、ガラスやピッコロミニなど、皇帝軍に仕える貴族のネットワークが、皇帝軍の内部や皇帝の居城都市ウィーンからイタリア半島にまで及んでいたこと、そして軍の人材や資金の調達がこうした社会的ネットワークを介して行われていたことが浮かび上がってきた。

また「皇帝によるパトロネジの再編」という論点に関しては、文献の調査に加えて、ドイツのバイエルン州で文書館の調査を行った。その結果、傭兵隊長ヴァレンシュタインの暗殺後にはイタリア貴族のガラスやピッコロミニが皇帝の愛顧を得て軍の中心人物となったこと、さらに彼らの社会的ネットワークは帝国諸侯の領域、すなわちバイエルン公領においても大きな影響力を持ったことが明らかになった。いいかえれば、ヴァレンシュタインの暗殺後に皇帝が進めたパトロネジの再編は、皇帝軍内にとどまらず、間接的に諸侯の軍にも大きな影響を及ぼしたことが明らかになった。これによって、帝国における権力拡大を図る皇帝と、自律性を主張する諸侯(バイエルン公)の政治的対立を新たな側面から照らし出すための手がかりを得られた。

これらの調査研究に関する成果は、イタリア中近世史研究会で口頭発表し、また部分的に『桃山歴史・地理』所載の論考でも発表した。

以上に示してきた研究成果は、ヨーロッパ諸国の文書館史料を活用して、より実態に即した歴史像の構築に寄与しただけでなく、近世ヨーロッパの軍事史・政治史・社会史などの近接領域を接合するという意義も持つといえる。

また本研究課題を通じて得た知見は、個別の論文や口頭発表だけでなく、幅広い読者層を対象とした歴史入門書のコラムや、本研究課題に関連するドイツ語文献の訳出(『軍事史とは何か』)にも活かされた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) 斉藤恵太「宿営社会の住民たち：三十年戦争における宿営地の空間編成と軍隊の社会構造」『桃山歴史地理』51号(2016)、3～28頁、査読無

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 斉藤恵太「近世イタリアの傭兵隊長と神聖ローマ皇帝軍：三十年戦争におけるガラッソとピッコロミニの例から」(イタリア中近世史研究会、2016年8月6日、於奈良女子大学)
- (2) 斉藤恵太「近世バイエルンにおける軍務官制度の展開 三十年戦争期の傭兵軍と君主権力」(史学会第113回大会西洋史部会、2015年11月15日、於東京大学)
- (3) 斉藤恵太「近世バイエルンにおける軍務官の名誉と忠誠：役人と軍人、領邦君主と皇帝のはざままで」(早稲田大学高等研究所セミナーシリーズ「新しい世界史像の可能性」、2015年10月31日、於早稲田大学)

〔図書〕(計2件)

- (1) ベルンハルト・クレーナー ( 斉藤恵太 訳)「社会のなかの軍隊：近世における新しい軍事史の視点」トーマス・キューネほか編著(中島浩貴ほか訳)『軍事史とは何か』原書房(2017)、398～421頁
- (2) 斉藤恵太「そして研究へ 西洋史への入口」大学の歴史教育を考える会編『わかる・身につく歴史学の学び方』大月書店(2016)、207～211頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://researchmap.jp/read0144618/>

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

斉藤 恵太 (Keita Saito)

京都教育大学・教育学部・講師

研究者番号：20759196